

【優秀賞】

線香花火

大前陽菜子（兵庫県 神戸市立白川台中学校 3年生）

私は、打ち上げ花火のようなインパクトも、噴き出し花火のような勢いもないのに、なぜか線香花火が好きだ。小さいころから毎年親戚とやっている、小さな花火大会も好きだ。

花火に火をつける前から、何となく緊張する。そんなことも知らない顔をして、ろうそくは、時おり吹く弱めの夜風に火をゆらされながら、短くなっていく。周りにいる人みんなが会話を止め、一点に集中するのだ。

噴き出し花火よりもはやく、火が火薬まで行き届き活動を開始する。まるで命が宿っていくようだ。うねるようにして、赤い丸から一つの魂をつくっていく。生き物を見ているような感覚になる。自分よりも小さいその生き物は、まさに今、自分を支配している。周りの人々も支配されている。私たちは、息をするのも忘れている。忘れているということさえも忘れている。

変化が始まった。今まで何も聞こえなかったこの場所に、一つの音が生まれる。チリチリと鳴いている。そして、小さな小さな火花を、四方八方に散らしていく。背景はなくなり、目に見えてくるのは火花だけだ。はじけている。力強く振動を感じる。何のおいもしない。私の五感は、全てこの生き物に注がれている。

どこにいるのだろうか、いつを生きているのか。なぜ、私はこの状況の中にいるのか。分からないし、どうでもいいと思えてくる。チリチリと、音は太さと強さを増す。とてもきれいだ。美しい。強い。激しい。明るい。どうか、もう少し続いてほしい。落ちないでほしい。周りにいる全員が思い始める。

「バチバチッ」。クライマックスに入る合図だ。この瞬間は、いつも新鮮だ。勢いよく動くこの生き物は、私をどう見ているのだろうか。命が宿ってから、かなり長い時間が経った気がするが、そんなに時は経っていない。まだ見ていたい。これほど美しいものを見たことがないような気がする。

私の中の時間は止まっているのに、それは時の流れに身を任せたまま、逆らおうとも止まろうともしない。バチバチと音が鈍り、勢いを失っていく。先ほどとは違う、繊細な美しさ。たった一度しかない、最後の瞬間。私は大きく目を開いた。赤い丸がポタッと落ちた。

辺りは闇につつまれ、私たちは夜に溶けこむ。息をしている自分に気づく。夏の夜のぬるい空気が、体をめぐっていく。周りの音が耳に入りこんできた。狭かった視野が広がり、夜の見慣れた景色が目映る。止まっていた時間が動きだした。

今年の線香花火もよかった。鮮やかさやはかなさを目に焼きつけることができた。私は目を閉じ、まぶたの裏に残る線香花火を思い出した。そして、目を開けた。これからの一年に思いをさせて、立ち上がる。